

## 【講演記録】

# インゲヤード・ローマン氏 (出品作家) による講演会

日時: 2018年10月27日(土) 14時~15時30分

会場: 東京国立近代美術館地下1階講堂

登壇者: インゲヤード・ローマン(デザイナー、陶芸家)、中尾優衣(東京国立近代美術館主任研究員)、野見山桜(東京国立近代美術館工芸課客員研究員)

通訳: 横田佳世子

## まえがき

2018年9月14日~12月9日に東京国立近代美術館工芸館において、「日本・スウェーデン外交関係樹立150周年記念 インゲヤード・ローマン展」を開催した。本展覧会は、スウェーデンを代表するデザイナーであり、陶芸家としても知られるインゲヤード・ローマン氏の幅広い活動を日本で初めて本格的に紹介するものであった。会場では、彼女がデザインしたガラスの器や自ら轆轤を引いて制作した器を始め、近年取り組んでいる建築プロジェクトなどとあわせて、作品を展示したテーブル上に設置した小さなモニターにおいて、彼女の言葉、制作理念なども紹介した。また、展覧会に付随して2回の講演会も行った。本講演録はそのうちの第1回目にあたるローマン氏による講演会を記録したものである。講演会では、ローマン氏からこれまでに制作した作品や、会場写真を用いながら、その背後の思想や理念などが語られた。講演会の最後に設けられた質疑応答においては、参加者から彼女のデザインの思考や理念についての質問が多くあり、関心の高さが伺えた。日本でも有田での「2016/」プロジェクトや木村硝子店との協働など様々な形で作品を発表してきたが、本展のカタログを除いてはこれまで出版された彼女に関する書籍等に日本語のものはなく、その思考や制作理念についてはあまり紹介されてこなかった。そのため、今なお新作を生み出し、新たなプロジェクトも立ち上げている彼女の活動、そしてその制作理念・思想を記録として残すため、本号に講演録として収録することとした。

本講演録の構成・文責は西岡が担当した。

**中尾優衣 (以下、中尾):** 本日は今回の展覧会の内容について、なぜ日本で展覧会が開かれることになったか、そして会場をどのように考えたのか、展覧会ができていくプロセスについてお伺いできればと思っています。

**インゲヤード・ローマン (以下、ローマン):** ご紹介ありがとうございます。そしてお集まりいただいたことを心より感謝申し上げます。

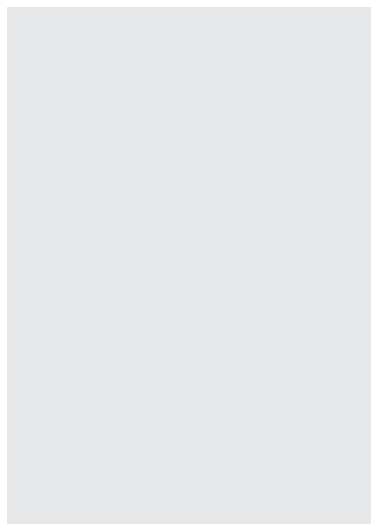


図1 スtockホルムのスタジオでの  
インゲヤード・ローマン  
写真: Anna Danielsson/Nationalmuseum, Sweden

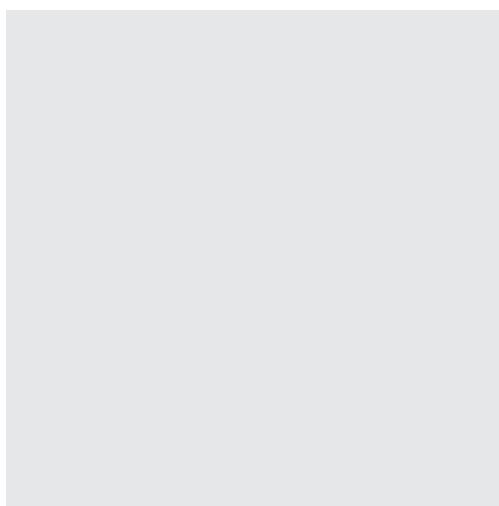


図2 講演会の様子

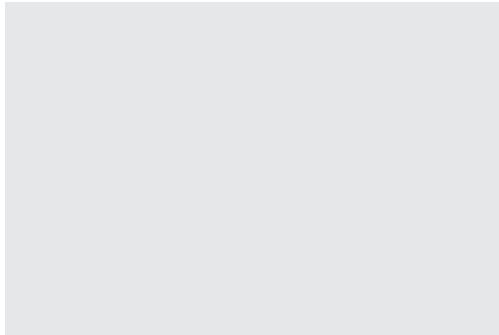


図3 轆轤をひくローマン氏

ます。このたび工芸館で展覧会が実現したことをとても光栄なことと感謝しています。私は今まで何度か日本にやってくる機会に恵まれましたが、そのたびに日本の皆さま、そして日本という国に非常に心をなぐさめられ、また安らかな気持ちになりました。工芸館で展覧会をすることが夢だったとは言えませんが、夢に見ることすらかなわないくらいに、畏れ多いことだと思っていたからです。そのため、今回工芸館で展覧会を開催できたことにひととき感激を覚えています。

**中尾**：今回は日本に1ヶ月以上滞在されていますが、その間に多くのトークイベントが行われましたね。

**ローマン**：私自身話すことは好きで、質問を投げかけられて答える場合、毎回どのような質問がくるのかと楽しみにしています。

**中尾**：今回の来日中のトークイベントでは、当館での展覧会自体についてお話しいただく機会があまりなかったのが、前半は本展のことを中心にスライドを見ながら伺いたいと思います。それから、彼女は展覧会が始まってすぐの頃より日本中を旅して回っていました。そして旅に出る前、今回私と共に展覧会を担当した野見山よりインスタントカメラを渡され、気になるも

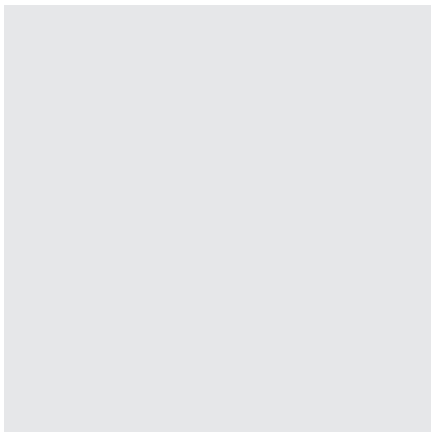


図4 《ボウル》1970年頃、インゲヤード工房

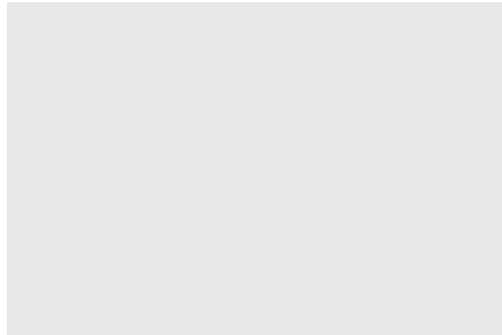


図5 《ボウル、エッグスタンド》1972年、インゲヤード工房

のを撮影してきてほしい、というお題を出されていました。彼女が今回の日本で何を見てきたか、これまでのことだけでなく、これからどういったことをしていきたいのか、将来のインゲヤードさんの展望などを後半で伺えればと思っています。

まず、インゲヤードさんの作品のことをお聞きしたいのですが、これはいつ頃ですか(図3)？

**ローマン**：3、40年前でしょうか。

**中尾**：この頃から彼女はやきものをつくっていますが、タイプとしては白い釉薬がかかっているボウル(図4)やテラコッタの作品(図5)です。ボウルは継続して作っていると思うのですが、何か思い入れがあるのでしょうか。

**ローマン**：私自身が必要だから作っています。やはり使い勝手のいいもの、私を使い続けていきたいものをいつも轆轤を回しながら考えて作っています。私はやきものを作るときスケッチをしません。基本的に轆轤で考え事をしています。

**中尾**：こういった作品、器を作り、そして皆さんに使ってもらうことでシェアするのが一つの喜び、と語っていますが、展覧会というのはまた別の形でのシェアをする場所ということになりますか。

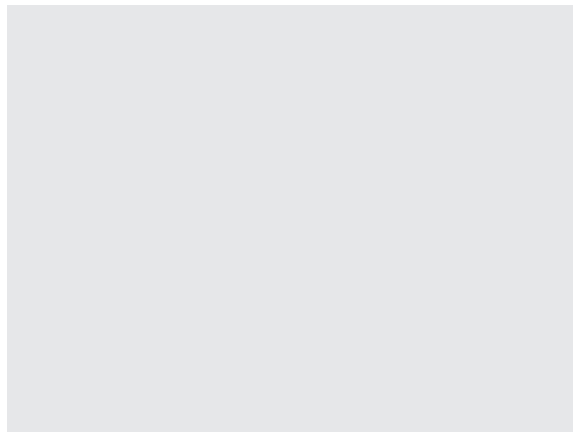


図6 《ガラス製水差し》スクルフ、《陶器製水差し》インゲヤード工房

**ローマン**：展覧会は、使っていただくのとは随分と違った形でシェアすることになります。日本の方は欧米人に比べて、器を見て、使い勝手や手ざわりについて想像することに慣れていると思いますが、私自身はただ見るだけでは、器の命は半分しか実現していないと思っています。完全に器に命が吹き込まれるのは、ずっと使われ、人の手にふれることにより、それが独特の味を身につけたときではないかと思っています。展覧会ではある意味では、半分だけの形を見せることになるかもしれません。そして、展覧会では必ずガラスケースの中に入れられた状態でしか紹介できないということを不満に思っていました。

**中尾**：実は私にとってもそれは一番大きなジレンマの一つです。工芸作品は使うために作られたものがかなり多いのですが、それを実際に使うこともさわることも出来ないという環境で、どのように見せるのがいいのかということについて、日々色々考えるところがあります。そういった中で、今回の展覧会の一つの答え、一つのあり方を示してくれていると思います。

今回の展覧会にも類似作品を出品していただいている水差し、一つはやきもので、一つはガラスですね(図6)。彼女はガラスのデザインもしています。こういった素材の違いについて伺えますか。

**ローマン**：この作品は1981年頃のもので、私が本格的にガラスを始めた第二期の作品です。私が最初にガラスに関わるようになったのは1960年代のことでした。4年間関わっていましたが、辞めることにした最大の理由としては、当時のスウェーデンでは、匿名性がすぎる私の作品は受け入れられなかったこと、そして、全てについてカラフルにしなければならなかったということが、私はどうしても受け入れられなかったからです。それは私にとっては非常に苦しく、重い決断でした。ガラスという素材が本当に好きで、ガラス職人と一緒に何かを作っていくということも本当に好きでした。ただ、自分の信念と違うものに関わり続けていくことは出来ないためガラスから身を引くことにしました。

その後10年間、私はやきもので家族を支えていました。やきもの作りをして10年程たった時に以前から付き合いのあった職人の方々が、会社を作るのでそこに関わらないかと声をかけてくれました。そこでは、非常に短期間でコレクションを考えなければなりません。その時に思いついたのが、やきもので実現していた形をガラスに落とし込んでみたらどうなるのか、ということです。実践してみた結果、非常に面白いものが出来上がりました。また、ガラス職人たちは、私と同じようにクラフトや、ガラス自体の特性を大切にしていきたいという思いが共通していたため、私はデザイナーとして関わることになりました。

1968年に私が手がけた水のためのカラフェ(図7)は現在でも製造中です。何をやってもうまくいかない、運が向いていない、悪いことばかりが続くという時に、私が立ち直れるのはこのカラフェがあるからです。この作品をみると自分を励ますことができます。1968年に作ったのに50年たった2018年になっても多くの方に使っていただけている、ということで今年は記念すべき年です。これこそが私が作り続けたいと思っていたシンプルで使い勝手がよく、そして匿名性がある作品です。

ガラスというと、熱いガラスを吹く、カットガラスなど加工のことばかりが目目されがちで、細かな作業は見落とされることが多いのですがとても大事です。

型職人にもあまり目が向けられませんが、ガラス作りにおいて要になってくる重要な方です。スウェーデンの場合、デザイナーはドローイングを送ったあと工場や工房の方に任せることはしません。必ずドローイングを持って直接工房に行き、現場で型職人と相談しながら作っていきます。

**中尾**：このように、彼女のデザインを実現するガラスをつくるために非常にたくさんの方が関わっています。

さて、イケアから出版されている本には彼女がコレクションしているものと彼女の作品が紹介されています。これ(図8)は何ですか？

**ローマン**：オブジェです。

私はそんなにたくさんのもを身近に置くのを好まないのですが、時々このように自分にとっても大切なものがあります。これはおもちゃですが、ばらばらにすると、中にテーブルと椅子が隠れています。確か1980年代のもので、今でも製造中かだと思います。

**中尾**：もしかしたらガラスを吹く際に使う木型のようなものに連想を受けて集めたのかと思ったのですが、そのような考えは

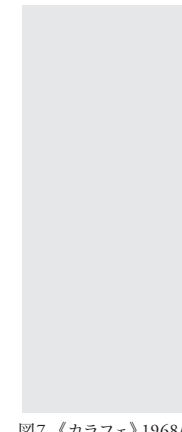


図7 《カラフェ》1968/1981年、スクルフ

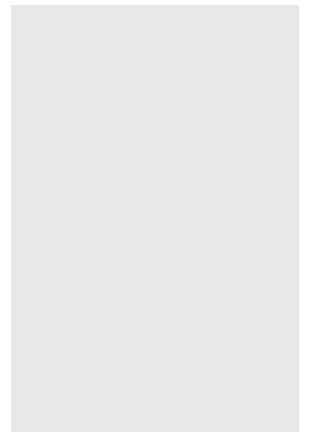


図8 木製のおもちゃ(ローマン氏私物)

ありましたか。

**ローマン**：残念ながら特になかったと思います。大抵の場合なぜこのグラスだったのか、なぜこれを選んだのか自分でも説明がつかないことが多いです。ただこれを素敵だと思ったから手元に残したのだと思います。

もう一つ私がこれに惹かれた理由としては、色の薄いところに修理のあとが見えることです。私にとっては味わいがあると感じたのだと思います。

これはやきものに関わるものです(図9)。やきものは焼き締めることで、大きく縮みます。やきものをする人であれば必ず収縮率を記録していきます。加えて私の場合は、必ずどのくらいの土を使ったのかということも残しておきます。ですので、美しくはないけれど私にとっては思い出がたくさん詰まったノートです。

**中尾**：こういったものは彼女の作品に深く関わっていますが、普段目にするのが少ないと思います。

**ローマン**：普通でしたらあまり紹介しませんが、イケアの本をまとめる方々が、是非とも見たいということで紹介しました。

以前は誰にも見せたくなかったし、見られたくもありませんでした。夫には常々、「私が先に逝った場合には、スケッチなど紙類はすべて処分するように。残しているのは形のあるものだけだから」と伝えていました。なぜかという、私はスケッチをするとき、ものすごく緻密に、何ミリメートルなのか、どのようなプロポーションなのかということも一つ残さず書くようにしているからです。ですが今では、そういったものに対して昔ほど必死になって隠そうという気はなくなりました。今も昔も変わらない思いは、一番大事なものは形を持っている実際の物であるということです。

**中尾**：スウェーデンのガラスメーカーであるスクルフから発表されたガラス食器シリーズ「ベルマン・コレクション(図10)」です。日本でもよく知られており、ファンの方も多いのではない

かと思います。ご自身でも大切にしてきたシリーズですか。

**ローマン**：はい。私にとってはとても大切なものです。ベルマンシリーズの特徴としては、工房で職人が手吹きで仕上げ、最後の加工まで施してから出荷されているという点です。そのため、値段は少し高めになっていますが、頑丈で丈夫です。職人は、それぞれの味やクセがあります。そのため、新しい職人が来るとその人の持ち味が前の人とは違うテイストを与えていきます。

**中尾**：このように一つずつデザインしてコレクションラインをつくりあげていく、という作り方自体がインゲヤードさんの作品の中でも重要な意味があると思うのですが。

**ローマン**：とても大事なことです。欧米では食器などを買うとき、12という単位が基本ですが、一度に買い揃えるのは難しい場合もあります。そのため、一つ一つ買い、使い心地を確認しながらどれを増やしていきたいのかを考えていくことや、一つ一つ必要なものを買っていきながらいくことが出来るということはとても大事です。使い勝手や自分の好みを確認しながら毎年増やしていけるということは、このベルマンシリーズの非常に大切な特徴となっています。そして、それはクラフトマンシップを実現させていくことにもつながっていきました。正直に言って自分でも、もはや何点あるのか分からなくなっていますが、4~5年前までは確かに追加していました。

**中尾**：次に展覧会についてお伺いしたいのですが、2016年にスウェーデン国立美術館で個展が開催されましたが、工芸館の会場とは異なっていますね。

**ローマン**：大きく異なっています。一つ目は展示空間の大きさです(図11)。スウェーデンは大きな展示室、工芸館の場合は独特の持ち味のある展示空間です。この違いの中で一番面白かったのは、作品との距離感です。スウェーデンの場合は大きな展示室のため歩きながら見るという感じでしたが、工芸館の場合には、もっと近くでしっかりと作品と向き合えると感じています。

**中尾**：今回はスウェーデン国立美術館のあとに巡回したヴァンダロルムデザイン美術館の会場構成と比較的似た感じになっていますね。

**ローマン**：はい。ここでとても大切なのは光と明かりです。スウェーデン国立美術館はストックホルムの街の中心部にあります。展示空間は天井から床までの大きな窓が三方を取り囲み、そして明かりが上からも入ってくるつくりでした。田舎も好きですがどちらかといえば都会を選びたいタイプなので、立地としては問題ありませんでした。対照的にヴァンダロルムデザイン美術館は、大自然に囲まれており、明かりが天窓から入ってきます。そのため、雰囲気も、受け止める印象も全く異なりました。工芸館で展示をする際の譲れない点として、日常の明かりがちゃんと入ってくるようなところで見せたいと強く思っていました。

**中尾**：そういったご希望を伺い、展覧会の会場をデザインしたスウェーデンの建築家集団であるCKRの方たちと図面をやり取りしていく中で、可動式の展示ケースをすべて移動させ、机を配置するという方向で落ち着きました。実は、普段工芸館では展示室内にケースが配置され、そこに作品を展示しています。今回は展示ケースをすべて仮設の壁の後ろに隠しました。これは工芸館としてもこれまでにない大がかりな施工であり、露出展示という点でかなりチャレンジングな展示でもあります。

**ローマン**：ありがとうございます!とても嬉しいです。

私はやきものをはじめた頃からボウルを作り続けています。第1室に展示しているボウルは1967年のものです(図13)。私は1960年代初頭にイタリアのファエンツァに1年半ほど留学していました。暖房が一切なかったため、スウェーデンよりも寒かったのですが、唯一温かいと思えたのが、ボウルを手で持って皆さんと一緒にいただいていたカフェオレでした。当時、スウェーデンではそのように洒落た飲み方をしていませんでした。

ですので、これは飲んだり食べたりするのに自由に使ってもらえる器です。カフェオレ、コーヒー、お茶、ご飯、など皆さんの思うように使っていただけたら光栄です。これは3色で作りました。ボーンホワイトと、ブラック、そしてテラコッタレッド。白と黒と赤の3色です。私はやきものに関わっている限りこの作品をずっと作り続ける、決してやめることはないと自分自身に約束しました。なぜなら、やきものは自分の成長を1日単位ではとてもはかれず、数年単位でないとわからないからです。ですから、ずっと同じものを作り続けていけば、自分自身の成長を作り手として、人間として見ていくことが出来るのではないかと思ったためです。

**中尾**：この作品を含めて、色々見ていて感じたことは、インゲヤードさんの作品は作ったときが一つのゴールではなく、非常に長いスパンでものづくりを考えておられるということです。

**ローマン**：クラフトマンでありデザイナーでもあるので、私は二重の意味で時間に対して非常に長いスパンで考えなければいけないと思っていますし、時間をかけなければいけないと思っています。それは身の回りに置くものについても、作り出すものについても共通していることだと思っています。1960年代に、私が学校を出てすぐに関わるようになったガラス工場とは、数年間で関係を解消しました。様々な理由があった中で、私がとても不満だったのが、コレクションのシーズン展開です。なぜなら気に入っていたグラスが割れてしまい、買い足そうと思った時、すでに取扱いがいいことほど悲しいことはないと思ったからです。気に入ったものはずっと使い続けたいし、ずっと身近に置いておきたい。そして、必要な時に買い足したいと思うのが当然だと思いました。

**中尾**：そうした時間の継続性を大切にされている一方で、私は今回、ご自身の変化を許容する柔軟性をすごく感じました。例えば、制作された作品が、生活の中で一緒に居る人や、食事の習慣によって変わっていくことを、非常にポジティブに受

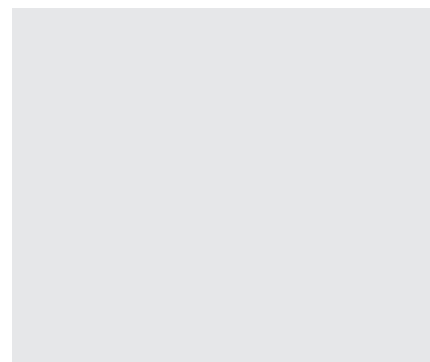


図9 ローマン氏のノート

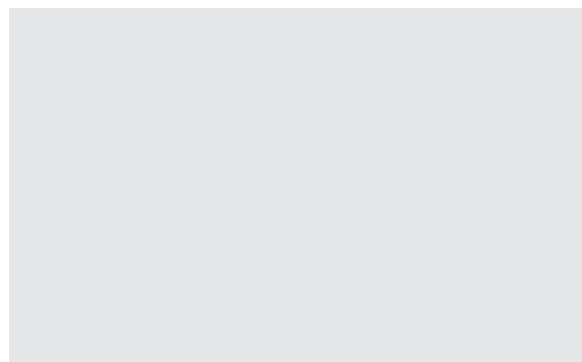


図10 「ベルマン・コレクション」スクルフ

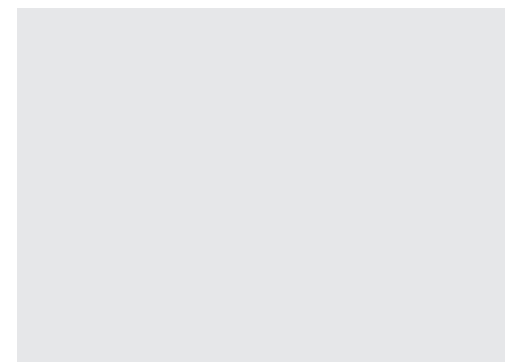


図11 スウェーデン国立美術館での展示風景(ストックホルム、2016年)

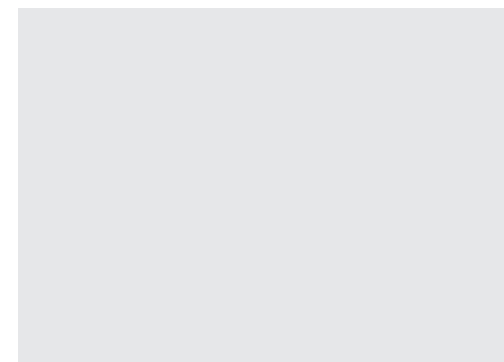


図12 工芸館での展示風景

け止めておられるように感じました。

**ローマン**：変化があって当たり前ですし、その変化を受け入れた結果、よりよくなるのであれば大いに吸収していきたいと思っています。たまにあることですが、使ったことのない新しい素材や工法、可能性に出会ったならば、それも全部有効活用していきたいと思っています。大切にすることは大切にしながら、物事は変わるのが当たり前だと考え、そのときの状況に応じることとはとても楽しいことだと思っています。例えば、子どもたちが小さかった頃は、家族の人数も多く、たくさんの人を呼んでもてなすことも多々ありました。その当時必要だったお皿の枚数や器の大きさが現在ではまったく異なっています。現在は大勢で食卓を囲むといっても6〜7人になりましたし、年をとると、昔みたいなお皿は必要でなくなります。それはごく自然のこととして受け入れています。

私はスクルフという小さな会社と20年間にわたっての関係を大切にできていました。私もそろそろ年をとってきて、お互いに随分の付き合いになってきたと思っていたところで、オレフォスからお声がけをいただきました。オレフォスはナンバー1

の会社でしたが、廃業してしまったことをとても悲しく思っています。オレフォスに声をかけていただいた時、気持ちの上では今まで関係のあったスクルフを大切にしていきたいと思いつつも、一方で、オレフォスとの関係が出来れば、今までにやる機会のなかったカットガラスや、遠心成形といったような技術を使い、様々な可能性を試してみることが出来るということでも悩みました。

結果、私はオレフォスに移りました。カットガラスの作品は、オレフォスが会社をたたむ数年前、私が最後に手がけたプロジェクトです(図14)。ですから私にとっては非常に思い入れのある、意義深いものです。

**中尾**：さて、工芸館での展示プランで、日本に到着してから位置を変更されたテーブルが一箇所ありました。

**ローマン**：不思議なことに図面で書いたときの雰囲気と実際にその場に立ってみたときの雰囲気はどうしても異なってきます。

**中尾**：是非会場で空間を感じていただけたらと思います。

次に第2室です。特にこの作品(図15)が不思議な質感で、ガラスなのかと質問する方が多いです。

**ローマン**：確かに不思議に思われるのも無理もなく、ガラスとやきもの中間のような感じとを考えていただくとうわりやすいと思います。私なりの絵付ガラスの新しい試みです。こちらは黒だけでなく白も展開しています。全体にほどこした白い模様は、雪に見立てています。これは、色を塗って白くしているのではなく、サンドブラストという技法で、すりガラス状に加工をしています。以前ローマで展覧会をやるという企画が急に持ち上がり、それに間に合わせるため、まだ荒熱が残っている状態でこ

の作品を送ったことがありました。その時つけた名前が「カラカラ」です。有名な観光地である、カラカラ帝の大浴場から名前を取っています。あそこは私もとても気に入っており、展覧会場がイタリアである、ということで名前をつけました。

また、今回もスウェーデン国立美術館の個展時と同様に自分がどういう考えで作品をつくっているのかをコメントしている映像を会場の中でご覧いただけるようにしています。そもそもこれを行ったきっかけは、スウェーデン国立美術館の担当者が、私が自分の制作理念について初日しかお話しできないことをとても残念がっていたためです。この方が、私は自分が何をやるのかを必ずきちんと分かった上でそれに向かって確実に歩んでいる、ということ伝えていきたいという思いを大切にされていたため、そういった工夫をしました。ということで私も映像の中で毎日展覧会場にいます。

**中尾**：普段工芸館の展示室内には展示ケースが並んでいるのですが、今回は窓側のケースを全て移動させカーテンも全てはずしています。そこで改めて気がついたのは、いつも展覧会で使っているケースは、作品を作品として見せるための切り取られた空間であって、今回のように建物の空間の一部として作品を見るという機能は果たしていなかったということです。本展で工芸館の建物にはじめて来て、「よかった」と言ってくれる方も多く、そういった意味で、私たちが工芸館の建物を改めて見る良い機会をいただいたと思っています。

**ローマン**：面白いのは、多くの方からこのような展示のあり方を思いついた理由や、自然光で見ることが出来るとは思ってもよらなかったとか、工芸館で太陽の光を見たのは初めてのような気がする、など色々ご意見・ご質問をいただくことです。美術館にある様々な作品の中で紫外線に強くないものはたくさんありますが、私の作品であれば大丈夫なのでいいのではと思っています。

初めに開催したスウェーデン国立美術館の段階で、少なくともあと一箇所巡回するとわかっていました。そのため、CKR

は当初から巡回させやすいよう、色々と考えていました。もう一つの工夫としては、テーブルごとにお互い仲間ごと、ファミリーごとに分けて見せることが出来るような展示にしています。

**中尾**：テーブル自体の素材をすべて変えるというのはご自身のアイデアですか？それともCKRのアイデアですか？

**ローマン**：CKRのアイデアです。彼らとは他にも2件程展覧会で協働しており、私の作品を熟知してくれています。なので、私も全幅の信頼を置いています。私たちはお互いの役割があることを分かった上で、お互いを信頼し協力して展覧会を作っていく仲間だと思っています。

**中尾**：今回の展覧会では工芸館の会場にあわせてやっていただいたのですが、普段の展示と大きく変わったのが第6室です(図16)。

**ローマン**：そうですね。実際に展示空間にいらした方はご存知のように、後ろは流れる滝の映像です。こちらで紹介しているのは、この10年程付き合いのあるスウェーデンの建築家との建物に関わる協働プロジェクトです。建築について、初めはこれだけ大掛かりなものに向き合ったことがなかったので、どうしたらいいかわからず、夜も寝付けなかったことも多々ありました。しかし、私は以前からやることがないからといって、そこで新しい可能性を自ら断ち切るということはしないでおこうと思っています。また、お声がけいただいたならとにかく関わり、自分なりにその状況を成長の機会と考えてやっていくべきではないかと思っています。

**中尾**：建築以外でも、イケアとの新しいお仕事などもされていますね。そして、こちらは今回日本での展覧会で初めて追加された作品ですね(図17)。

**ローマン**：最新作です。この場所(和室)を使った展示のアイデアについて工芸館から問い合わせを受けた際に完成したばかりでした。この作品は、スウェーデンのある地方のダンボール工場との協働で出来ました。地域にある企業と一緒に何かが出来ないかと主催者から言われた際、以前から非常に思い

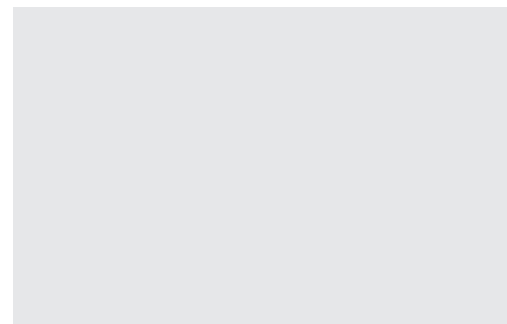


図13 《ボウル》1967年、インゲヤード工房

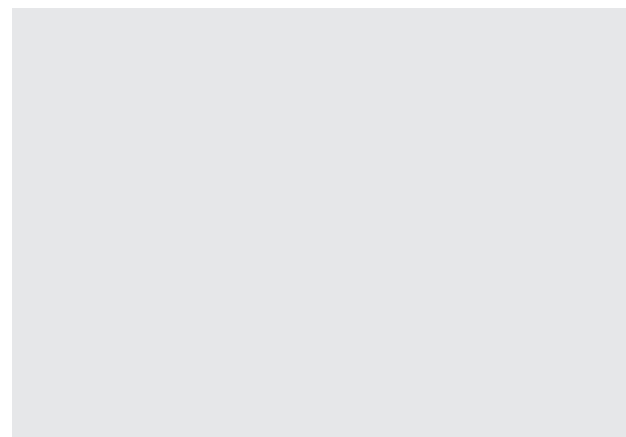


図14 《クリスタル・アイ》2009/2010年、《ボンボン》2009年、オレフォス

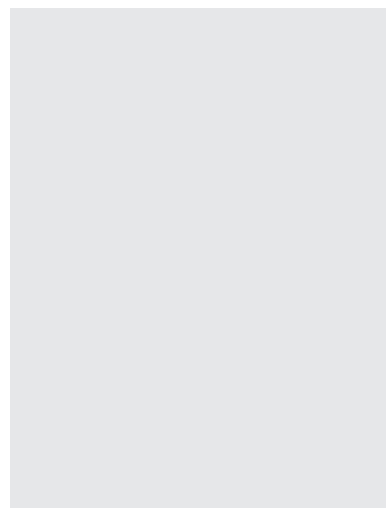


図15 《カラカラ》2004年、オレフォス

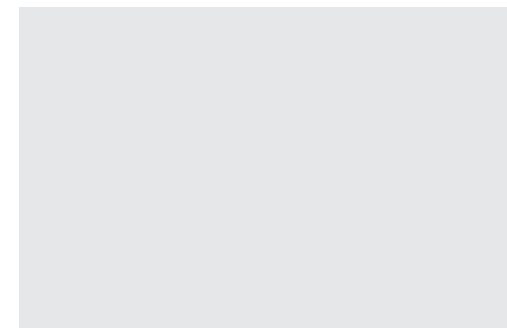


図16 工芸館での展示風景

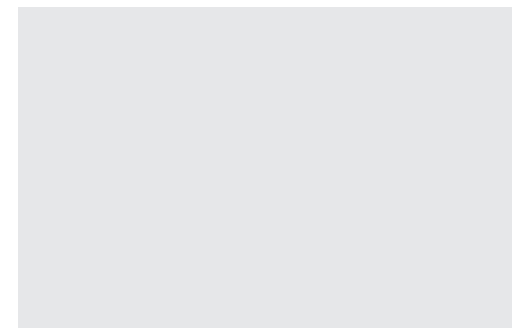


図17 工芸館での展示風景

入れがあり、大好きなダンボールという素材を使うことを思いつきました。厚みや手ざわり、穴が開いているところ、波状になっているところなど、全てが好きです。普段使わない素材なので様々な可能性を考えた結果出来上がった作品で、今までにないものです。

用途としては盛り器です。素材が紙というだけなので、りんごや季節のもの、その時々で盛り付けていただければと思っています。

**中尾:**美術館なので生花は生けられないため造花ですが、これもインゲヤードさん自身が実際にアレンジしたものです。

**ローマン:** 私なりにいけばなから色々学んだ成果です。

**中尾:** それでは最後に、展覧会でどういったところを見ていただきたいかをお伺いしたいと思います。インゲヤードさんが展覧会のことを説明する際、「これは回顧展ではない。なぜなら私はまだ作っているし、これからも先に進んでいくから。」とおっしゃっていますが、特にこの展覧会で伝えたいところや見ていただきたいところについて一言お願いします。

**ローマン:** 1点1点出来るだけじっくり向き合っていたきたいということです。特に素材に着目していただければと思います。

**野見山桜(以下、野見山):** インゲヤードさんは9月から日本に滞在しており、展覧会の準備を終えたあと2週間ほど日本各地を旅しました。旅をするなら写真を撮られるに違いないと思い、出発前にインスタントカメラをお渡ししました。その写真から彼女が日本で何を見てきたのかを追っていきたいと思います。展覧会にもありますが、「インスピレーションは日常から出てくる」と彼女は言っています。そこで、毎日インゲヤードさんは何を見ているのかを知りたいと思いました。

**ローマン:** 夢中になると電話の音も耳に入らないような性質なので、写真を撮り忘れたところがほとんどです。

一番最初はタクシーの中です。ホテルから工芸館に向かっていく際、くつろいでゆったり座っていた時に「あー東京だわ～」と思ったので撮りました。

**野見山:** 今回滞在中に訪れた場所とその目的をお聞かせください。

**ローマン:** 東京の素敵などころは、高層ビルや真面目なビジネスマン、車が多く走っているかと思えば、静かで時代を超越しているような場所もある。実は、日本に来た際は渋谷でしばらく過ごすことが大好きです。たまにはとても多くの人があふれかえているところに行くのも面白いと思っています。

**野見山:** それから京都など、他の場所にもいかれたと思うのですが。

**ローマン:** 新幹線で行きました。

私にとって血を分けた姉妹のような大親友がいます。だいぶ年下なのですが、彼女の夢は日本に来ることでした。展覧会がオープンしたばかりのときは大変なので、しばらくしてから二人でなるべく目立たないようにゆっくりと回ったときの写真です(図18)。ここはお庭も好きです。好きなことばかりで説明できません。

金閣寺は3回目です。最初のときは夫と当時10歳くらいだった息子と一緒に1980年代に来ました。その時は修復の前で、私たち家族3人の他には人がおらず、そして雨が降っていたことが印象的でした。その後、金閣寺へは2度訪問しましたが、やはり最初の時が一番強い印象で、私にとって一番意味のある体験だったと思います。なんともいえぬ趣がありました。元々そういうものだという事は分かっているのですが、今はピカピカツヤツヤしすぎかと思えます。年月を経たあとの独特の味の良さというのも大事にしたいな、という気持ちがあります。

**野見山:** インゲヤードさんは建築もお好きで、もちろん大阪では光の教会を訪問されたと思います。

**ローマン:** 昨年夫と一緒に安藤忠雄の建築を見て回ることを

目的として旅をしました。その時、光の教会はとても素敵で、強烈な印象でしたので、妹のような親友に是非ともこれを見せたいと思いました。これからも何度も行こうと思っています。

**野見山:** そして、関西から北陸へ向かい、21世紀美術館も訪問しました。

**ローマン:** レアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》は実際に体験することをオススメします。

**野見山:** 素材のテクスチャーや細かい部分も見ていらっやと思うのですが。

**ローマン:** 自分では作れないと思うようなものを見るのは楽しいです。

**野見山:** 観光の写真や、器の写真もありますね。

**ローマン:** 日本民藝館にも行きましたし、石川県の小松では知り合いに日本海にも連れて行ってもらいました。

これは祇園です(図19)。「これをやってはいけない」というべからず集がとても素敵だと思いました。日本のこういった看板がとても好きです。また、ピクトグラムで色々なことを伝えるというのがとても好きです。

**野見山:** とてもコンポジションが素敵ですね(図20)。

**ローマン:** 金沢の兼六園です。

この人たちはずっと同じところに座り、コケの手入れをしていました。何時間も全く動かずに。そういったのも見ると庭は数え切れないほどの人の手間がかかって成り立つということがすごく良く分かります。

それから、蔵王にも行きました。今から1年前、ある方に会った際、山を持っているというので、今年たずねていったところ、とても素敵だったので、これからも何度も行こうと思っています。

**野見山:** これから色々プロジェクトが待ち受けているとのことでしたが、昨日有田から戻られたのですよね。これがその時の写真の一つです(図21)。

**ローマン:** スリッパがきれいに並んでいるのを見ているのがと

ても好きです。香蘭社の工場の入り口ではいつも同じ状態になっています。

**野見山:** 先程、以前行ったときもまったく同じ状態だった、とつぶやいていたのが印象的でした。

現在も2016年からはじまったAritaプロジェクトが継続していると思います。このようにインゲヤードさんは日本各地を回り、ネットワークを築き、未来へのプロジェクトを作ろうとしています。今回の展覧会はインゲヤードさんの今後の展望を垣間見るきっかけになると思います。

## 質疑応答

**Q1.** 現在、工芸館に展示されている作品で、16点のシードルのグラスをサークル状に並べ、窓からさす光がりんごの影を作っているという展示に大変驚きました。あれはローマンさんがデザインされて職人の方が意図して作ったグラスでしょうか？

**ローマン:** はい。意図的に私がデザインしています。シードルの原料はりんごでりんご酒とも呼ばれます。あのグラスはアイスシードルと呼ばれる度数の高いりんご酒を飲むことを想定して作られています。私は元々それをたしなんでいませんでしたが、このグラスを作るために、強いりんご酒も飲めるように特訓しました。そして、ソムリエの方4〜5人と会い、りんご酒の特性として何が求められるかを聞いていった中で、あの形はとても自然に生まれました。なぜかといいますと、アイスシードルはとても冷やして飲むため、手の熱が伝わらないようにすることが明快でした。そのため脚付きグラスになりました。お酒の特性と飲み方を考える中で、自然に出てきた形でした。同じようにコニャックのグラスも、これまでのような形と全く異なっています。これまでの常識を除いて考えたときにむしろ脚がついていないほうがいいと思いました。飲んでいるときに手のぬくもりが伝わることで、コニャックの香りや味をちゃんと味わえるので、下に置いてコニャックを冷まさないようにするための形として考えました。

何よりも嬉しかったのは、質問の中で影に驚いてくれたことです。自然光の作る影は最高だと思っていますし、日々の私たちの回りにあるものの影や、形に注目していただけたら何よりも嬉しく思います。

**Q2.** マテリアルにこだわりがあると思うのですが、スウェーデンの陶器の材料の土と、日本で違いがありますか？日本の材料だからこそ出来ることはありますか？

**ローマン:** 国だけでなく産地によっても異なりますし、同じ産地

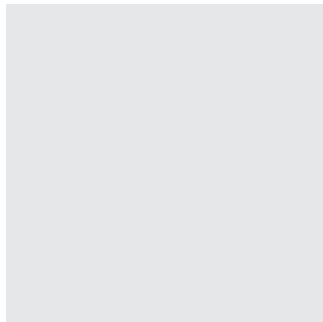


図18 慈照寺銀閣 (2018年10月7日、インゲヤード・ローマン氏撮影)

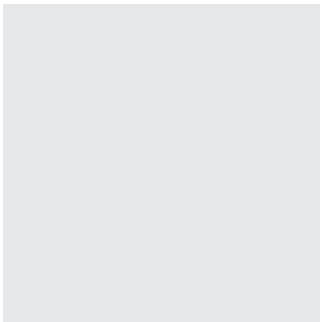


図19 祇園の看板 (2018年10月10日、インゲヤード・ローマン氏撮影)

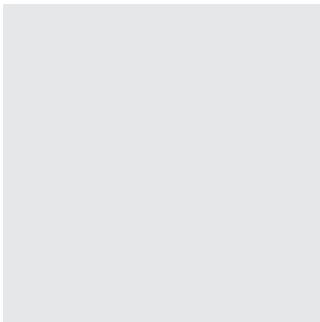


図20 兼六園での作業の様子 (2018年10月13日、インゲヤード・ローマン氏撮影)

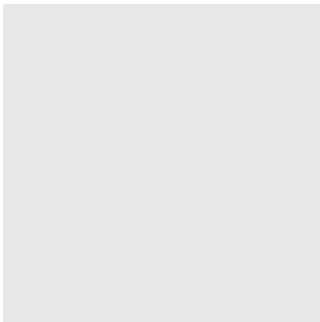


図21 香蘭社入り口の様子 (2018年10月25日、インゲヤード・ローマン氏撮影)

の中でも異なります。例えば、有田という磁器を連想されますが、日常使いのやきものをつくるような非常に重い土もあります。ですので、国どころか地域によっても土は異なるため、必要に応じて、作り方を変えたり、自分の好みに近い土を見つけたりすることは陶芸家であれば誰でもやっていると思います。ですから、あまりにも種類が多すぎて単純に比較することは出来ないと思います。スウェーデンでは、ほとんど国内産の土は手に入らないため、自分のニーズに合わせて土を取り寄せて作っていますし、やりたいことに合わせて土を選び、釉薬を開発するというやり方で誰もがやっています。土によっては、非常にくせがあり、なかなか轆轤で思うような形にならないものも多くあるため、試行錯誤をくり返しながらか好みを選んでいきます。

色については、ボーンホワイトと呼ばれる土の色そのまま、少し黄色味があった色の土を好んで使っています。昨日有田の釉薬の専門家と話していたら、その方が「有田の土はね…」と言いよんでいたので伺ってみましたところ、死人の顔色を思い出す人がいると言ったのです。そういわれてみると、確かに釉薬のかかかっていない有田の土は、生気がなく生きた感じがありませんでした。釉薬や、赤などの色がないと生命力を感じられない、だから有田は必ず釉薬をかけるということが分かりました。

**Q3.** 工芸館で、先ほど写真に出た黒いボウル(図13)を拝見した際、黒い漆を塗った漆器のような色・反射がイメージされました。今まで日本の漆器をご覧になったことがあるかということと、もしあればその感想をお聞きできたらと思います。

**ローマン:** 漆は昔から大好きですし、私にとっては新しい素材として今、プロジェクトが動き始めたばかりです。ですので、これからどうなるのか楽しみにしています。

**Q4.** 作品を作る上で、匿名性を大切にしているということですが、それは何か理由があるのでしょうか？

**ローマン:** 物というのは役に立ち、自己主張せず、落ち着きや

穏やかさなどがあり、私の心をかき乱さないような存在であってほしいと思っていることから、匿名性を大切にしています。料理をするときの道具にしても、これが何なのかとかうるさく語りかけなくてもいいと思っていますし、黒い器をよく作っているのは、料理が映えると思っているからです。そういった意味では、黒い器は透明なガラスのちょうど逆ですが、深みを与え、そして料理を引き立て、きれいにおいしく見せてくれると私は思っています。

**Q5.** 蓮の花をかたどったガラスの作品がありましたが、蓮の花というモチーフを選択した理由や経緯があればお聞かせいただければと思います。

**ローマン:** 蓮としてご覧いただいたようですが、私としては特にどの花ということではなく、観念上の植物が生えていて、そこに花が開いているものとしてデザインしたと思います。使い勝手については、食器なので、好みに合わせて自由に使いたいと考えて作っています。確か、木村硝子さんの説明によりますと、日本ではスウェーデンよりも少し小ぶりなお皿を使っているということですが、スウェーデンでは大きなお皿に何でも盛るという傾向があります。そうではなく、日本の場合は《The Set》の一番下のお皿だったら食事中にずっと使い続け、その上にあるボウルに汁物を入れたり、コップの中には赤ワインを入れたり、グラスには水をいれるなど。質問の趣旨としては、どういう思いで形ができたのかということだと思いますが、端的に言いますと、自由に使い方を考えていただきたい、と思っています。

**中尾:** みなさんご質問ありがとうございました。

展覧会にすでにお越しの方も、別の日に見ていただくと太陽の加減や天候によって色々楽しんでいただけたらと思いますので、是非何度でも足を運んでいただければと思います。

本日はありがとうございました。

構成・文責 **西岡梢** (東京国立近代美術館工芸課研究補佐員)